

ペーパーサミットジャパン大盛況

— 紙と印刷の魅力，多彩な形で発信 —



2日間で4,125人が来場し，盛り上がったペーパーサミットジャパン2026

ペーパーサミットジャパン2026（主催・全日本印刷工業組合連合会，日本洋紙板紙卸商業組合）が7月24日・25日に東京・港区の都立産業貿易センター浜松町館3階で開かれ，初日が2,737人，2日目が1,388人，計4,125人の来場者でにぎわった。印刷加工会社・紙卸商・関連団体の出展があった会場には隙間なく100を超えるブースが並び，来場者への説明やオリジナル商品の販売などに忙しかった。6つのトークセ

ッションもほぼ満員となり，学びの場としても有益な情報を提供した。

▶ 販売も好調，出展者も大きな手応え

7月24日9時30分から展示室内で行われた開会式には，主催の全印工連から瀬田章弘会長，日紙商から清家義雄理事長，協力した日本製紙連合会の小川恒弘顧



開会式で左から、MUD協会の浦久保理事長、全印工連の瀬田会長、日紙商の清家理事長、製紙連の小川顧問

問、同時開催された「MUD FAIR 2026」の主催者を代表してメディア・ユニバーサル・デザイン協会の浦久保康裕理事長が登壇した。

あいさつした瀬田会長は、百万塔陀羅尼やゲーテンベルクの活版印刷術など紙にまつわる歴史に触れ、人類が発明した偉大な紙の功績を紹介した後、「ところがデジタル革命が起こり、どうしてもデジタルの方に注目が行ってしまい、紙がなおざりにされている感じがして残念だ。デジタルの良さもあるが、やはり紙は人々の暮らしを彩り、心を豊かにするもの。これをしっかり社会につなぐのが、紙業界、印刷業界の使命だと思っている。ぜひこの2日間、多くの人に皆さんの思いを伝えていただき、希望ある未来を一緒に拓いていきたい」と述べた。

10時の開場からほどなく一般の来場者が詰めかけ、午前中から熱気があふれた。多くのブースが展示だけでなく、自社商品の販売を行っており、買物を楽しむ風景が“祭”や“縁日”のムードを醸し出していた。

出展者も、「予想以上の数に驚いている」「初開催だが大成功と言えるのではないか」「商品の売れ行きがいい」「紙の人気の大きさに気持ちが明るくなる」など、多くが好感触を得ていた。

今回、主催者側では、メディアへの情報発

信や学校への案内に力を入れたほか、後援の東京都、経済産業省、日印産連なども周知に協力した効果が表れたようだ。

夏休みということもあり、家族連れや友人同士での来場が多く、外国人の姿も見られた。紙製品の魅力に世代や国境は関係ない。入場は無料で、気軽に遊びに来られる雰囲気もある。

出展内容は、ペーパーサミットジャパンに合わせて新商品を用意した会社、日頃の販売商品を並べた会社、地元でのイベント出展で磨いてきた商品を持ち込んだ会社など様々。また、印刷工業組合単位での出展も多かった。複数の会社が連携し、地域の特色を前面に出した取組みが効果的だった。

24日の夕刻には、小池百合子東京都知事が視察に訪れた。あいさつでは「『紙にはこんな活用方法もあるの



紙の魅力を広くアピールした



小池東京都知事が視察に訪れた（7月24日）